リチャード・セラの最初期屋外彫刻 ――1970 年東京ビエンナーレ「人間と物質」展出品作品《環で囲む――底板（ヘクサグラム）》*To Encircle: Base Plate (Hexagram)* ――

大前 美由希　　慶應義塾大学

1970 年 5 月に開催された第 10 回日本国際美術展（東京ビエンナーレ）は、コミッショナーに就任した中原佑介が「人間と物質」というテーマを掲げ、国内外から前衛的な若手作家 40 名を招いた、挑戦的・意欲的な展覧会であった。戦後日本における現代美術の展覧会のなかでも、最も重要なものの一つとして名高い。

当時、前衛的な若手作家の一人として注目されていたリチャード・セラも来日し、作品を制作・発表した。この日本滞在がセラにとって転機となり、京都で禅寺の庭を鑑賞した経験が、「歩きながら観る」“walking and looking”という後年の作品に通底するテーマへと繋がったことは、既に語られてきた。しかし、「人間と物質」展でのセラの出品作品については、詳細に論じられてきたとは言い難い。展示されたのは 5 作品で、彫刻作品《環で囲む――底板（ヘクサグラム）》*To Encircle: Base Plate (Hexagram)*、上野公園に植樹した杉の木、フィルム作品《手―鉛》（*Hand-Lead*）、カール・アンドレとの共作《豚はその子らを食べてしまう》、そして当時は公表されなかった無題の作品である。

セラが今日知られるような巨大な屋外彫刻作品を制作するようになったのは、日本からの帰国後のことであり、1970 年までは《動詞のリスト》に見られるように制作における動作に焦点をあてた作品に主に取り組んでいた。つまりここで、制作する作家の身体から「歩きながら観る」観者の身体の動作へと焦点が移行したのである。

本発表の目的は、《環で囲む――底板（ヘクサグラム）》をこの転換点として位置づけることである。この作品は、セラの彫刻作品のなかでも、ランドスケープの中に設置された最初期の作品であり、人が入ることのできる内部を持った最初の作品である。そして、タイトルに「囲む」という動詞が使われていることは、セラの他の彫刻作品と同様、この作品においても動作が問題となることを示している。但しこの作品においては、作家だけではなく、作品の中に入ったり環に沿って歩く観者もまた、動詞の主体なのである。

「人間と物質」展において既に完成した状態で持ち込まれた唯一の作品であった、フィルム《手―鉛》は、鉛を「掴む」手の単純な動作をモチーフとし、身体知覚の伝達を問題とする。セラ本人の手が出演していることが端的に示すように、手の動作は、物に働きかけて作品を作る作家の動作を表しており、この作品を観ることによって、作家の身体知覚を観者が共有するというコミュニケーションが成立するのである。作家のみならず観者の身体が射程に入れられているこのフィルム作品と比較するならば、《環で囲む――底板（ヘクサグラム）》が、身体知覚の共有のみならず、実際に観者の身体の動作まで引き起こす点において、優れてセラの 1970 年の転換を体現していることが理解される。

（おおまえ・みゆき）